

## 第五章 マフ・ポッターの裁判

数週間後、マフ・ポッターの裁判がありました。

セント・ピーターズバーグの皆がそれについて話し、トムとハックは心配していました。

「トム」とハックが言いました。

「あれ…について誰かに言ったか？」

「いいや、もちろん言ってないさ」とトムは言いました。

「かわいそうな年老いたマフ、僕は本当に彼をかわいそうに思うよ。人々は彼が人殺しだって言ってるけど、それは真実じゃない。そして彼らはマフを絞首刑にするんだ！」

「俺もマフのことをかわいそうに思う」とハックは言いました。

「彼は親切な人だよ。前にマフは俺に魚を半分くれたんだ。でも俺たちはインジャン・ジョーについて誰にも言えないよ」

「以前マフは僕の尻を手伝ってくれた」とトムが言いました。

「今度は、僕が彼のことを助けたいよ」

「刑務所に行って、マフに何か食べる物を持ち込もう」とハックは言いました。

二人は食べ物を持って小さな刑務所へ行き、悲しんで疲れ果てた様子のマフに会いました。

「誰も年寄りのマフのことなんか覚えてないさ。でも君たちは俺の友達で、俺のことを覚えてくれている。ありがとう！」とマフはほほ笑んで言いました。

今やトムはつらく感じていました。

刑務所にいるかわいそうな年老いたマフのことについて考えたため、トムは夜、眠れませんでした。

マフの裁判の日は、とても重要な日でした。

セント・ピーターズバーグの誰もがその裁判に行きました。

マフは古く汚れた服を着て、悲しい顔でそこにいました。

インジャン・ジョーもそこにいました。

裁判の間、たくさんの質問と答弁がありました。

事態は気の毒なマフにとって、順調に行っていませんでした。

すると弁護士が、「トーマス・ソーヤー君を呼びたまえ！」と言いました。

皆が驚いてトムのことを見ました。

なぜ弁護士はトム・ソーヤーを呼んでいたのだろうか？

トムは何を知っていたのだろうか？

トムは心配し、びくびくしていました。

「トーマス・ソーヤー君、君は6月17日の真夜中にどこにいたのかね？」と弁護士が尋ねました。

トムは素早くインジャン・ジョーを見ました。

「僕は墓場にいました」とトムは言いました。

「君はホス・ウィリアムさんの墓の近くにいたのかね？」と弁護士が尋ねました。

「はい」とトムは答えました。

「なぜ君は真夜中にそこにいたのかね？」と弁護士が尋ねました。

「僕は幽霊を見るためにそこへ行きました、し…死んだネコを持って」とトムは言いました。

何人かの人々が笑い始めると、弁護士は怒りました。

「君は墓場で何を見たのかね？」と弁護士は尋ねました。

「何が起きたのか私たちに言ってくれ」

トムは本当の話をしようと決心しました。

裁判にいた人々はトムの言うことを聞き、とても驚きました。

「…それでその後マフ・ポッターさんが地面に倒れて、インジャン・ジョーがマフさんのナイフを取って、そして…」

突然、とても大きな音がしました。

それはインジャン・ジョーで、窓の外へ飛び出て行ったのです！

誰も彼を止めることができず、彼は逃げて行きました。

保安官はとても怒っていました。

今や誰がロビンソン医師を殺したのか皆が知り、マフは自由の身となりました。

トムは真実を語り、マフの命を救ったため、セント・ピーターズバーグで有名になりました。

トムは自分が正しいことをしたので満足でしたが、夜にはインジャン・ジョーについての恐ろしい夢を見ました。

暑い夏の日々が過ぎ、誰もインジャン・ジョーを見つけることはできませんでした。